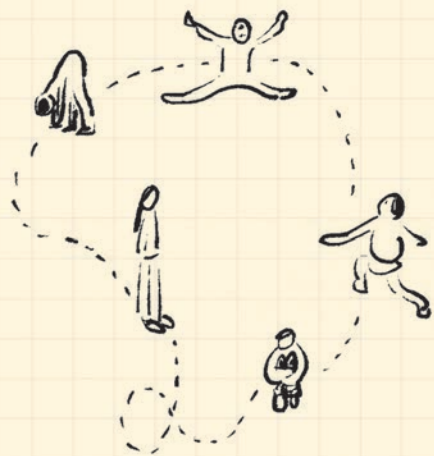


私たちが  
見てきい話した  
インクルーシブ鑑賞  
ワークショップの記録



KEIO  
UNIVERSITY  
ART  
CENTER



#### 慶應義塾大学アート・センター (KUAC)

1993年に開設された大学附属の研究センター。特定の分野や思想、理論体系にかたよることなく、総合大学の特徴を活かした領域横断性、すなわちさまざまな学問分野の成果を総合する立場から、現代社会における芸術活動の役割をテーマに、理論研究と実践活動をひろく展開しています。

#### 都市のカルチュラル・ナラティブ (カルナラ)

現代文化の発信地、国際都市として知られる港区は、同時に、多くの寺社仏閣や史跡、そして歴史ある企業が所在する歴史文化都市でもあります。このダイナミックな時間軸をもつ都市文化の眺望を、一層明らかにするためのプロジェクトが、「都市のカルチュラル・ナラティブ」です。今年度の事業では「社会包摂 (インクルーシヴ)」的視点に目を向け、東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムでの対話ツアーや大本山増上寺でのトークイベントを企画・実施しました。

#### 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

2012年発足。代表は林健太さん。横浜美術館や東京都写真美術館をはじめとした全国の美術館や学校で、視覚障害者と晴眼者が言葉を介して一緒に美術鑑賞をするワークショップを行なっています。  
※以降、本冊子では便宜上「とつくる」と略称させていただきます。

# もくじ

ごあいさつ … p. 2

インクルーシヴってなに? … p. 3

出会ったことば … p. 4

取り組んだこと … p. 6

学んだこと … p. 9

発見! … p. 12

失敗した～ … p. 14

もやもや どっちがいいんだろう? … p. 16

こぼれ話 … p. 18

編集後記 … p. 19

こんな本やサイトが参考になりました … p. 20

## みなさん、こんにちは！

慶應義塾大学アート・センターでは2023年1月から3月にかけて、インクルーシヴ鑑賞ワークショップを実施しました。

その準備段階や実際に関わった人との対話から多くのことを学びました。このZINEでは、そんな学び、気づき、そして失敗談などを学芸員補・吉岡萌とインターン生・福田真子の視点からざっくばらんに綴っていきます。運営側の生の声として、みなさんがインクルーシヴ関連のワークショップ等を行う際の参考になれば嬉しいです。



吉岡萌

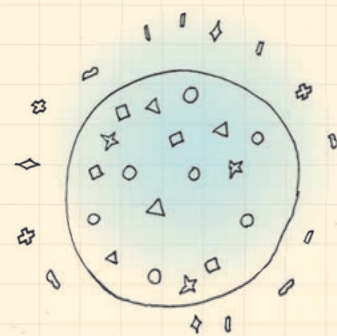
慶應義塾大学博士課程。研究領域はフランス新古典主義美術。2020年から1年間、アーティゾン美術館で、インターンシップ（教育普及）を経験。その際に「鴻池朋子ちゅうがえり」展の関連プログラム「みる誕生」鑑賞会の実施に関わり、ユニバーサル・ミュージアムやインクルーシヴ鑑賞ワークショップの取り組みに関心を持つ。現在は慶應義塾大学アート・センター学芸員補として、展覧会関連イベントや鑑賞ワークショップの企画・実施に携わっている。



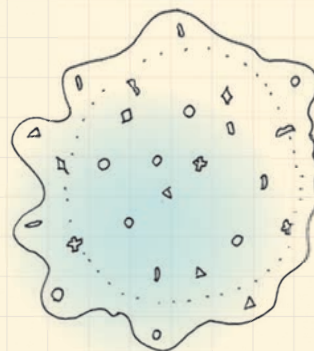
福田真子

ドイツ在住。大学に通いながら、ウェブマガジン/コレクティブ「ヴァルナブルな人たち」、Zine イベント「ZINEFEST Leipzig」を運営。ライブツィヒのコミュニティスペース「日本の家」の活動に関与するなど、中間共同体に関心を持ち活動続ける。2023年1月から3か月間 KUAC ヘインターンとして在籍。@magazine\_vulnerable\_people

# インクルーシヴってなに？



エクスクルージョン  
あるコミュニティからある一定のものが排除されているイメージ。



インクルージョン  
全ての人がそのまま、まるっと他のものと共存しているイメージ。

障がいについて語る時にインクルーシヴ/インクルージョンを始めとして、ユニバーサル、ダイバーシティ、バリアフリーなど似たような言葉がたくさん登場します。そのため私たちもどの言葉を使うか迷いましたが、「インクルーシヴ」を選びました。

インクルーシヴは、英語から来ていて「inclusive」と書き、「全てを含んだ、包括的な、包含的な、包摂的な」という意味があります。対義語は「エクスクルーシヴ (exclusive)」で「排他的な、排他的な」という意味があります。

「インクルーシヴ」とは、個人のそれぞれの差分や強みを埋めたり、平均化しようとするのではなくて、社会の全ての人を「含み」、その特性を活かせる社会、環境にしていこうという考え方だと私たちは考えました。

2023年の日本においては、障がい者をはじめとして、女性、LGBTQ +、非日本語話者、高齢者といった少数派とされる人たちや生きづらさを感じている人たちなどその他にも、多くの人が含まれるのではないのでしょうか。

## 障がい者、障害者

「障害」表記には「障（害／碍／がい）」といったヴァリエーションが存在します。近年では「障がい」とひらがなで表記されることもあります。意味そのものの変換を伴わない消極的な置き換えとして批判の声もあります。また、慶應義塾協生環境推進室でも「障害」は社会や環境の側にあるということにより意識する観点（障害の社会モデル）から、漢字表記を用いる立場をとっています。私たちはこのような考え方に賛同しつつも、ワークショップにスタッフとしてご参加いただいた視覚障がい当事者からの意見を踏まえ、今回の ZINE では「障がい」という表記を使っています。

▶これ、どっちがいいんだろう？もやもや「障がい」という言葉の扱い方…p.16

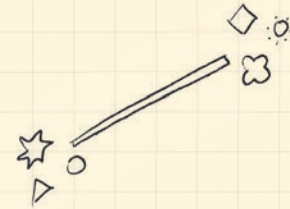
出会ったことば

## 点訳

文字や文章を点字で書かれた文章に翻訳すること。点字図書館等の機関に依頼すれば、チラシや本に含まれる文章を点訳して貰えるほか、市販の簡易な点字機を用いれば、個人でも点訳をすることが可能です。ただし、例えば URL のような複雑な文章は、機械を用いると正確な翻訳が出来ない場合もあるらしく、プロに依頼したほうが確実です。



## 目の 見えない人 見えにくい人 見える人



## 「まっすぐモード」 と 「ぶらぶらモード」

「とつくる」さんが実施しているワークショップで用いられる2種類の鑑賞方法です。「まっすぐモード」は目的がはっきり決まっている話のことで、例えば、目に見えることを言葉にしたり、専門家に話を聞いてみたりするモード。対して「ぶらぶらモード」は目的が明確でない曖昧なお話を指します。このモードのように、思いついたことや取り止めのないことを適当に話してみることで生まれる面白さや、雑談のほうが上手く伝わる物事もあるでしょう。今回は「まっすぐ」と「ぶらぶら」を組み合わせ対話を実施しました。大事なのはあくまでふたつのモードの存在を知ること。最初にモードについて説明することで、どのような人でも発話しやすい雰囲気形成されていました。

今回のワークショップでは、参加者を「目の見えない人」「見えにくい人」「見える人」という風に呼びました。健常者／視覚障害者という二項対立ではなく、このような呼び方を用いることで、サポートする側／される側というような視点が排除され、その場の関係性がフラットになる気がします。実際ワークショップ内では、必ずしも見える人が一方的に説明するだけではありません。見える人はつい目の前にある「正解」を探しがちですが、見えない人とともに様々な見え方を共有することで、作品の解釈や意味が新たに立ち上がってくる瞬間があります。このように、みんなで対話し、影響を与え合いながら作品を鑑賞することで、人と人の関係も「揺れ動く」ことになります。

# 取り組んだこと

## 日本点字図書館へのヒアリング

2022年11月2日(水) 日本点字図書館



実際の点字図書や点字入りチラシとともに、点訳の制作方法や予算について教えていただきました。一階にはショップもあり、拡大読書機や文字を読みやすく拡大したラジオの番組表といった様々なグッズが販売されていました。今回は簡単な「点字機」とシールを購入してみました。そしてQRコードを示す点字シールを「詩のおみやげ」カードに貼って、西協展関連ワークショップで配布しました！

ワークショップ「読書／詩を読む編」の準備として、本を読むのは音声？点字？知らない本にどうやって出会う？など、それぞれの読書体験や方法について経験を交換しました。

## 「読書／詩を読む編」プレ座談会



2023年2月5日(日)開催 協力：とつくる

時には脇道に逸れて、ホラー映画の楽しみ方や Amazon での買い物の仕方といった話で盛り上がり…、そこから本題に戻ったり！(これこそぶらぶら対話?)そして、この会で出た「どのように詩を読んでいる？」というテーマが実際のテーマとして採用されました。

## マリンサイエンスミュージアム：目の見える人と見えない人のまっすぐ＆ぶらぶら対話ツアー

東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムを舞台に対話ツアーを実施！鯨の骨格標本や鳥類の剥製、南極に関する展示物を鑑賞し、言葉を通してそれぞれの見方から発見や感想、疑問を共有しました。



2023年2月4日(土)開催



協力：とつくる

# 学んだこと

## 「健常者」という言葉

「健常者」という言葉の使い方についてみんなに聞いてみました。目の見えないスタッフの方からは、こうした語について「障がいのない状態が正常であるという印象を受ける」との意見ももらいました。参加者が視覚障がいのみならば「晴眼者」を用いることも可能ですが、聴覚障がい者や他の障がい者も参加する可能性があります。あえて「健常者」を使うという選択もありますが、こうした意見もあるなかでこの語を積極的に使うのは個人的には避けたい気持ちがあります。話し合いでは「参加者10名のうち、視覚障がい者3名、聴覚障がい者2名」というように、障がいのない人(=マジョリティ)にはラベルをつけず表記するのが良いのではという結論に落ち着きました。



2023/3/11(土)開催 西脇展ワークショップ「散歩編」キャンパス内を散歩する参加者

増上寺の武智公英上人にインクルーシヴの観点から、現在の取り組みや今後の課題についてお話しいただきました。また、「とつくる」のメンバーからは、当事者の視点からの寺社での体験や困難を共有していただき、その後、参加者全員で意見の交換を行いました。 [2023年2月16日(木)開催]

「詩を持ち帰って欲しい」という思いから詩が印刷された「詩のおみやげ」カードを配布しました! QRコードから朗読のリンクにも飛ぶことができます。



詩人・西脇順三郎の詩を題材に詩の楽しみ方を見つけてみようというワークショップです。事前に参加者に送った3編の詩について、どのような読み方をしたのか聞いてみました。その後、展示室で朗読を聞いたり、原稿や押し花帳などを見たりして、詩の印象がどう変わるのかを味わいました。

「詩は難しい」「詩の読み方が分からない」と言っていた参加者たちも、最後には「分からなくても楽しい!」と西脇の詩世界への入り口を見出していたようです。

[2023年2月25日(土)開催 協力:とつくる]



西脇順三郎没後40年記念展「ソロの旅」インクルーシヴ鑑賞ワークショップ・読書/詩を読む編



インクルーシヴを語る会: 歴史文化あふれる増上寺とともを考える



## 見えない人・見えにくい人の ガイディング

障がいの程度は人それぞれ。近くの駅まではひとりで来られても目的地までの送迎が必要な人や、送迎は必要ないけれど館内ではガイディングが必要な人…。そもそも、見えない人は白杖で数十センチ先を確かめながら歩くため、知らない道を歩くハードルがとても高いそうです。普段は Google Maps の音声案内を利用したり、道の手がかりを事前に覚えて歩いたりしているのですが、初めての場所に行くのはどうしても難易度が高くなりがち。なので、今回はサポートが必要な場合、申し込み時の備考欄で伝えてもらうようにしました。

## 過剰サポート

当事者が望む必要なサポートは当然行うべきですが、過剰なサポートになってしまう可能性もあります。例えば、道の案内。増上寺で行った語る会では、車の音声ナビのように細かく説明することは丁寧で親切だけど、そこまで情報を欲していない場合もあるとの意見が出ました。実際、親切心からであっても、見える人が常に物事の説明をしてしまうと、立場の固定に繋がってしまう危険性があります。ミュージアムでも、障がい者が必要とする情報やサポートを気軽に伝えられる、そしてそれに答えられる環境づくりをさらに進めていく必要があります。



## 伝わりやすさのチェック

当初、作成しようとしていた申し込みフォームが当事者からは使いづらいということで、今回は、おすすめしていただいた Google フォームで作成しました。また、イベント HP や申し込みフォームの内容や分かりやすさについても、とつくるの目に見えないスタッフさんに確認してもらい、言葉の表記や説明文の工夫について助言をいただきました。目に見える人たちだけで進めていると、見過ごしてしまうことも多いので、当事者の視点からのチェックは必須。

▶申し込みフォームはどれが一番使いやすいんだろう？…p.16

## どこまで何をすればいいのか

参加者のお迎えはするのか、手話通訳はするのか、託児所を準備するのかななどの配慮。そしてそれをどこまでやるのか、出来るのかの決定が必要。これは企画の根幹にも関わるので方向性をチームで決めておくとスムーズに進む気がします。

## 障がいの把握

イベント申し込み時の Google Form にて「障がいのあり・なし」と「障がいの種別」という質問項目を設けました。今回のように様々な見え方の人が集まるワークショップでは申込者が全員視覚障がい者の可能性もあります。事前準備の段階でスタッフを拡充したり、環境を整備するためにもきちんと把握しておくことが大切でした。イベントの種類によっては、こうした質問をすべきではない場合もあるため、その都度質問項目のチェックは必要だと感じました。

## 余裕を持った時間の設定

余裕を持った時間の設定というのはどのワークショップにおいても非常に大切。スタッフの病欠等を含め、不測の事態が起こる可能性は常に念頭に置いてスケジュールを組む必要があると改めて実感しました。例えば、移動時間は長めに設定しておく余裕がもてました。

## インクルーシヴの根本

参加者がいるかいないかに関わらず、事前に手話通訳の手配をしておく、細かいケアが出来るように十分な数のスタッフを確保するなど、誰もが参加できる状況を準備することが「インクルーシヴ」の考え方であると実感。支援が必要な参加者の申し込みが無さそうだから事前に準備する必要は無いだろうという憶測で動くのは運営側の都合。取り組みの過程で、このように排除されてしまう人がいると痛感しました。



2023/2/25 (土) 開催ワークショップ「読書 / 詩を読む編」  
展示室内で実際の実原稿もみんなでみた



2023/3/11 (土) 開催 西脇展ワークショップ「散歩編」にて  
イサム・ノグチ作《無》を触る参加者たち

# 発見!

## 本の読み方

西脇展関連ワークショップのため、「読書」をテーマにプレ座談会を敢行。機械音声読み上げ、人の声での朗読、点字で読むなど、目の見えない人の中でも「本の読み方」が分かれしました。詩を読む際には「自分の頭の中で読み上げたいから、音声ではなくて点字で読みたい」という声も。中には野球中継を聞きながら点字で本を読むという強者もいらっしゃいました!

## お迎え

視覚障がいを持つ人のなかには、初めて行く土地だとガイディングが必要となることもあるので、今回は駅からミュージアムまでお迎えとお見送りを行いました。ガイドする側は緊張するけれど、見えない人や見えにくい人はむしろ慣れた人にガイドされていることに慣れているとのこと。ですが、分からないこと、心配なことがあったらまず本人にきちんと確認するのが良いですね。

▶過剰サポート…p.10

▶どこまで何をすればいいのか…p.11

## 偶然との出会い

「どうやって新しい読む本と出会う?」というところから生まれた話題。目の見える人は本屋さんなどで偶然見つけた本を読んでみたとの出会いがありますが、目の見えない人は偶然になにかに出会うということが非常に難しいとのこと。みんなで偶然に出会いに行く、そんなワークショップもあつたら面白いのかも。

## 迷惑をかけてしまいそうな場所には行かない・行けない?

賽銭箱の大きさも分からないし、その奥に何があるのかも分からないため、言ってしまうとお寺や神社は「手から小銭が消えていく場所」のように感じてしまう。こんな発言が増上寺で開催した語る会において、目の見えない人からありました。みんなで語らうこの日のような場所が無ければ聞いていなかったかもしれない個人の考えや思い。異なる経験や体験をみんなで共有し合うこと、その手立てとして対話が力を発揮することを実感しました。

## 見よう見まねが出来ない

お寺や神社には参拝やお焼香の仕方にルールがあります。晴眼者は前の人のがやった事を見て、なんとなく真似をすることが出来ますが、目の見えない人はそれが出来ないというお話がありました。また、前の人に倣って少しずつ進まなければいけない行列に並ぶのが苦手という発言も。

## 社会のベーシックを変える

語る会の中で「お寺での坐禅体験に行く際に、まず自分たちの行きたいという気持ちに伝えてくれたのが嬉しかった」という発言が目が見えない方からありました。必ずしも物理的に整備をしなければならないのではなく、受け入れ側の心持ちから変えることが大切というのは学びになりました。しかしその一方で、受け入れに感謝するのが普通では無くて、そもそも参加できることが「普通」になる必要があるのではないかと、という指摘も。今まで私たちが思ってきた「普通」がまさに今変わっていて、社会の側が障がいを作り出しているという社会モデルの考え方と深くコネクトする話題でした。





## 点訳した詩を配布しよう と思ったけど…

「カルナラ」の一環で点訳コンテンツを制作しようということになり、詩人・西脇順三郎の詩を配布するという案が出ました。しかし、制作費の関係で来場者全員には配れない…（世知辛い）。でも、来場者のなかで視覚障がい者（と思われる人）だけに配布しようとする、当然ながら配布する対象の選別になってしまいます。無料配布物として机に置いておくという提案も出ましたが、KUAC ではそのことを点字や音声等で伝えられる設備の用意がありません…。モノを制作しても、まず環境が整っていなければ上手く活用することは出来ないと痛感した出来事でした。

## QRコード近すぎ事件

西脇展では目の見えない人のために論考と朗読詩篇の書き起こしデータを公開しています。会場で配っている冊子の巻末にQRコードを載せていますが、が…2つのQRコードが近すぎて、実際に目の見えない人にスキャンをしてもらうとどちらか一方しか読み取れないという結果に。実際に使う人のことも考えたデザインが必要だと実感しました。

## 人数の思わぬ落とし穴

マリンサイエンスミュージアムでの対話ツアーは参加希望者が定員の3倍以上(!)も集まったため、急きょ枠を増やして対応しました。ところが、実際の参加者に加えて、同伴者、手話通訳、ファシリテーター、スタッフ…と気づけば1グループ20人弱の大所帯に…。当日はなんとか乗り越えましたが、その辺りも考慮して最初の人数設定の必要があると学びました。

▶もやもや どのくらいの人数、バランスが適切? p. 16

# 失敗した〜

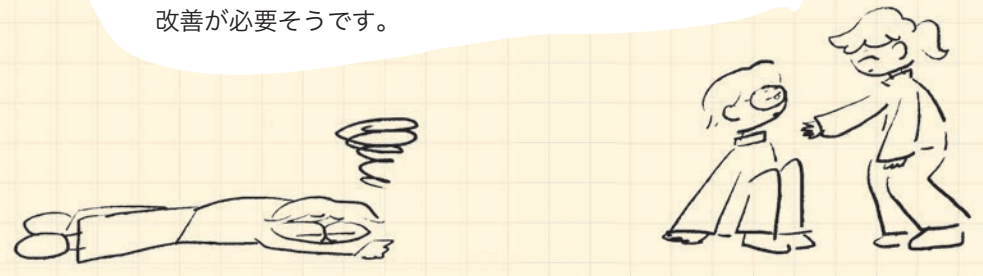
## チラシ読みにくい問題

灰色地に白文字の  
入ったチラシを実際に刷って  
みたら、見えにくい人や色覚  
多様性を持つ人にとっては文字が小さく細く  
読みづらい結果に…。充分な大きさの字や、はっきり  
した色合いなど、まずは誰かに伝える最初の発信の段階であ  
る広報からもインクルーシヴを考える必要がありますね。  
インクルーシヴを語る会では、参加者の見えにくい人から実際  
に指摘を受けてしまいました。見えやすさは人それぞれではあ  
るものの、フォントは11ポイント以上で出来れば太字の方  
が見えやすいとのこと。また、色彩のメリハリがはっきり  
していないと分かりにくいとも。現在では、ユニバー

サルデザインの視点から配色  
ガイドラインも出て  
いるため、今後はこ  
うした資料も参考  
にしていこう…。

## HPが上手く見られない!

見えない人にスマホか  
らHPにアクセスしてもらった  
ものの、最新のお知らせが表示され  
る黒いポップアップが邪魔で上手く開けま  
せん。しかも、このポップアップ、通常はタップ  
すれば消えるのですが、音声ガイドを使っていると  
押しただけでは消えてくれず先に進めないのです（な  
ので、一回音声ガイドを切ってもらってポップアップ  
を消しました）。これは実際に見えない人にテストして  
もらうまで全く気づきませんでした。HPのシステム  
をすぐに変更することは難しいと思いますが、今後  
改善が必要そうです。



## 「障がい」という言葉の扱い方

「出会ったことば」で説明したように、「障害」の表記にはいくつかの方法があります。そのため、このZINEで私たちがどの表記を選択するか非常に悩みました。ひらがな表記が消極的な変換という意見はとてよく分かります。また、慶應義塾の方針に従えば、漢字で表記すべきでしょう。しかし、今回「とつくる」さんにHPの文章チェックをお願いした際、目の見えないスタッフから「ひらがなで表記したほうが良い」との指摘を受けました。どちらの意見にも理がありますが、一緒に参加してくれている人が少しでも不快感を感じるならば、今回は「障がい」とひらがなで表記しようと決めました。とはいえ、慶應義塾大学アート・センターとして今後どのような表記にするかは、これからも様々な意見に耳を傾けながら考えていかなければならないと思います。▶出会ったことば 障がい者、障害者…p. 4.

## 届くべき人に情報がきちんと届いて欲しいけど…

今回、最初にイベント情報をKUACのSNS（Twitter, Facebook, Instagram）で公開したものの、障がい者の参加申し込みはほとんどなし…。「とつくる」さんのFacebookでのお知らせ後には見えない人、見えにくい人、聞こえない人と様々な立場の人からたくさんの申し込みがありました。現状のKUACの発信範囲では情報が行き届いていないかも…と感じました。ワークショップの参加者からは「参加できて良かった」、「またやって欲しい」というような感想をいただくことができたので、今回情報が行き届かなかった潜在的な参加希望者も多くいるのではないかと思います。普段、見えない人や聞こえない人たちがどのようなルートでイベントのお知らせを受け取っているのか知る必要もありそうです。今後、協生環境推進室との協力や障がい当事者へのヒアリングとともに、SNS発信を工夫したい！

## 申し込みフォームはどれが一番使いやすい？

実際に使っている方から、Googleフォームのフォーマットに慣れていて一番使いやすいというお声をいただきました。しかしながら、フォームを使い慣れていない人や、申し込みの直前で画像認証が出てきて申し込みできなかった参加者の方もいました。他館のWSではフォームでの申し込みが難しい人のために、メールでの申し込み方法を記載している場合もあります。今後はこのように複数の方法を用意するのが良いのかも。そのためにも、HPにはワークショップ主催の問い合わせ先（メールアドレス・電話番号）の掲載は必須です。▶学んだこと 伝わりやすさのチェック…p. 10.

## どのくらいの人数、バランスが適切？

対話型ワークショップにおいては、少人数の方がみんなが発言しやすい環境が作れます。その一方でなるべく多くの人にワークショップに参加して欲しいという気持ちもあります。しかし参加人数が増えるとスタッフの人数も増やす必要が…。参加者にとっての満足感や充実感は何なのか考えつつ、実施側のオーバーワークも防ぎたいというのが葛藤です…。▶失敗した～ 人数の思わぬ落とし穴…p. 14.

ちやもや  
どっちがいいんだろ？



## 英語での表記

日本語にも、目の見えない人、目の不自由な方、視覚障害者、視覚障がい者、盲目の方など、さまざまな言い方があります。英語においてもこれは同じこと。例えば今回お世話になった「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」は「Verbal Imaging Museum Tour with Visually Impaired People」という英訳をあてています。どの翻訳をあてるかもステートメントのひとつになるかもしれません。例えば、persons with disabilities, disabled persons, seeing difficulties などなど……

## ぶらぶら散歩してみよう

2023年3月に西脇展ワークショップの第2回として散歩編を行いました。散歩編では西脇の詩に出てくる植物や生き物をキーワードに「よそ見」をする目をつくり、三田キャンパス内を「ぶらぶら」歩いてみようというのがテーマでした。アイデアの発端となったのは、プレ座談会での「とつくる」スタッフさんとの会話でした。知らない道を歩くのはハードルが高いので、散歩に対する憧れはあっても難しいそう。今回はみんなでぶらぶら歩きながら、壁のタイルの触りごごちを確かめたり、小鳥の声に耳を傾けたり、詩に登場する「野ばら」を偶然発見したり……普段は三田キャンパスに来ると、歴史ある建物や彫刻、大きな樹木といった目立つものばかりに目を向けてしまいがちですが、「よそ見」をしながら歩くことで、これまで見過ごしていた道やなんてことのない雑草にも自然と目が向き、会話が弾みました。散歩って、ぶらぶらするってとっても楽しい。いつか西脇が散歩していた多摩川辺りのルートも辿ってみたい！



# 編集後記

## 吉岡 萌

鴻池朋子氏の「みる誕生鑑賞会」への参加を経てインクルーシブ鑑賞の試みに興味関心を得たものの、今回のワークショップの準備を通して初めて知ることばかりで、もっと学んでいかなければという思いを新たにしました。そして、同時に強く感じたのが「しゃべる」って大事だなということ。今回、Zoomや対面による打ち合わせ、下見を通して、私たちはたくさんのことを言葉で共有しました。確かに、しゃべるという行為は冗長になりがちで、普通より多くの時間がかかってしまうことも事実です。でも、「おしゃべり」の過程にあったため息やもやもやした疑問、ちょっとした眩きから、何か新しいことに気づく機会を得ることもできます。今回のZINEには、そうした会話のなかで発見した物事の断片を散りばめました。これからももっと「おしゃべり」や「よそ見」をしながら、みんなが楽しめるような環境づくり・ワークショップができればいいな。



## 福田 真子

「みんなちがう」という大前提の下、じゃあどうしていこう？というのが今私たちが取り組んでいること。自分の発言によって誰かを傷つけてしまう、嫌な思いをさせてしまうという気持ちから、うわべだけの表面的な話しか出来ない時もあります。でも、例えば自分が中学生の時には生理の話題を気軽に語れなかったのが、今少しずつもっとオープンに語れるようになってきている実感があります。「センシティブな話題」として遠ざけるのではなく、もちろん勉強はしながら、もっとどんどん気軽に話そうよという気持ちになりました。ドイツに外国人として住む私にとって「インクルーシブ」は当事者性を持った身近なテーマです。今私たちがこの時点で考えていることを形に残せたので、これをどんどんアップデートしていければ良いと思います。

# こんな本・サイトが参考になりました!

## 書籍

- 伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』光文社、2015年
- 伊藤亜紗「当事者の経験にもとづく視覚障害者の身体論」『美学』第68巻第2号(251号)、2017年、1-12頁
- 伊藤亜紗「身体の違いがひらく空間」『アナザーユートピア——「オープンスペース」から都市を考える』NTT出版株式会社、2019年、220-228頁
- 大高幸「視覚に障害のある人々が美術を経験する場としての美術館——米国における社会的文脈とメトロポリタン美術館の事例から」『芸術学』三田芸術学会編、14号、2010年、5-20頁
- 寺島洋子、大高幸編著『博物館教育論』放送大学教育振興会、2012年
- 津田英二『インクルーシブな社会をめざして』かもがわ出版、2011年
- 日本ソーシャルインクルージョン推進会議編『ソーシャル・インクルージョン——格差社会の処方箋』中央法規出版、2007年
- 広瀬浩二郎『万人のための点字力入門——さわる文字から、さわる文化へ』生活書院、2010年
- 広瀬浩二郎『さわって楽しむ博物館——ユニバーサル・ミュージアムの可能性』青弓社、2012年

## 参考リンク

- 「『見えないこと』から『見ること』を再考する：視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」アーツスケープ  
[https://artscape.jp/focus/10156072\\_1635.html](https://artscape.jp/focus/10156072_1635.html)
- 「視覚障害のある人と共に楽しく鑑賞するには」エイブル・アート  
<https://www.ableart.org/org/mar/skill.html>
- 「障害者は英語で何て言うの?～【handicap(ハンディキャップ)】他」障害者.com  
[https://shohgaisha.com/column/grown\\_up\\_detail?id=177](https://shohgaisha.com/column/grown_up_detail?id=177)
- 「『障害』と表記することについて」慶應義塾協生環境推進室  
<https://www.diversity.keio.ac.jp/bf/index.html>
- 内閣府 ユースアドバイザー養成プログラム  
[https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/h19-2/html/4\\_1\\_4.html](https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/h19-2/html/4_1_4.html)
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所  
[http://www.nise.go.jp/blog/2000/05/b1\\_h060600\\_01.html](http://www.nise.go.jp/blog/2000/05/b1_h060600_01.html)



## Special Thanks

視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

発行日：2023年3月24日

発行者：慶應義塾大学アート・センター

監修：慶應義塾大学アート・センター（渡部葉子、吉岡萌、福田真子）

執筆・編集：吉岡萌、福田真子

イラスト：吉岡萌、福田真子

写真：森山緑、石本華江、吉岡萌、福田真子、木村麻悠子、菅原真彩

HP：<http://www.art-c.keio.ac.jp/>

助成：令和4年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業

※無断転載禁止



CULTURAL  
NARRATIVE  
CITY  
OF A  
都市のカルチュラル・ナラティブ